神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

My life as a teacher at KCUFS

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山川, 英彦, Yamakawa, Hidehiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1829

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

神戸外大での教員生活を終えて

山　川　英　彦

外大を卒業し名古屋大学の大学院に進み、授業で本格的に古典文を読むようになり、始めて言葉には、特に文学の世界では言葉に背景がある、換言すれば言葉には歴史があると言うことを知った。作家は背景のある言葉を好んで使用する。言葉の背景まで調べなければ真に理解したことにならない。現代文であれば辞書を参考にすればかなりの程度まで理解できるが、古典文では辞書を引くだけではとうてい理解できないことばかりなのを始めて知った。外大の授業でも古典文講読の授業で『史記』を読んだが、訳本などもあり漢和辞典を引いて何とか責めを果たしていた。名古屋ではそれでは済まなかった。第一に講読のテキストは訳本があるような作品ではなかった。幸い親切な先輩に恵まれ手取り足取り指導を受け、工具書の名前や使用法を覚え、ようやく授業の担当箇所を半分ぐらい理解できるようにはなったが、自分でも満足できる状態ではなく、恥ずかしい毎日であった。今でこそ便利な検索ソフトがある。しかし当時はひたすら工具書を使い原典に当たって調べるしかなく、膨大な時間が必要であったが、それはそれで楽しい作業であった。

先輩たちに何とか助けてもらい、名古屋での修行を終え、外大に赴任し授業を担当することになった。古典文に背景があることは理解していたが、現代文でも同様のことがあることを思い知らされたことがあった。

現代文の授業である女性作家のエッセイを読んでいたとき、ふとどこかで見たことのある語句があった。宋代の女流詞人李清照の「詞」の一句だった。たまたま名古屋大学での授業で読んだことがあったので気づいて李清照まで溯って説明することができたが、でなければ字面の解説だけで済ませてしまうところであった。中国文学の奥の深さというか、独特の世界を改めて痛感した。のちに中国から招聘した交換教授にこのことを話すと、少し前は文章を書くのは大学で本格的に中国文学を勉強した人間が多かったので、現代文でも背景のある言葉を使用するのはごく当たり前のことであった、誰もが文章を発表するようになった最近とは時代が異なると説明を受けた。その時は予習時に気づいたからよかったが、気づかぬままに表面的な字面の説明で終わらせてしまったことが退職するまでにどれだけあったことであろうか。

言葉に背景があると言うことの正反対のことも体験した。別の作家の作品を読んでいるときに「妻の誕生日に力士を贈る」という一句があった。「力士」

はいくら辞書を調べても文脈に合う意味は掲載されていない。私の学生時代とは比較にならないほど多くの辞書が出版されるようになったにもかかわらず。困り果てて教室でここは分かりませんと正直にいうと、広州に留学経験のある女子学生が手を挙げ「それ、石鹸のラックスのことです」と教えてくれた。当時は中国社会が急速に発展していた時期である。海外から新しいものが流入し、ラックスも高級石鹸として地位を築きプレゼントとして贈られるようになったのであろう。中国語における外来語・新語が改革・開放経済とともに大量に生まれることとなったごく初期のことであった。

そののち外来語・新語を中心とした辞書も編纂され、かなりの部分がカバーされて辞書を引けばほとんど意味が分かるようになったが、なお辞書にない言葉は少なくない。中国社会が変化し発展するにつれますますこの問題は増え、頭の痛いことが増えた。そんな時に役立ったのはインターネットである。中国語の世界でもパソコンの利用が普及し、私のような時代遅れの人間も利用するようになった。「××　什么」と検索すればパソコンが教えてくれる。もちろんすべてがこう首尾よく行くということでもなかったし、付随して新たな問題も発生したが、便利な時代になったものである。

34 年も教職に就いていればそれこそ走馬燈の如くに様々なことが脳裏を去来する。しかし思い出などというものは一人自分の胸に蔵しておくべきもので人様に語るものではないであろう。それに書き始めれば切りがない。教師としての体験を記し、中国語を学ぶ学生たちの参考となることを願い、神戸外大での教員生活 34 年間のまとめとしたい。